リレー随筆　709

乳鉢

加熱する日本の夏

大分市医師会　　松　本　善　企

大分市医師会立アルメイダ病院整形外科の松本善企です。

今私はポルトガルのアルガルベという北大西洋が一望できる田舎町で，小春日和のような過ごしやすい気候，ゆったり流れる時間の中で太陽のエネルギーを存分に浴びて生活する素晴らしさをかみしめながら，この寄稿と向き合っています。

屋内プールで気ままに泳いだり，ジムで軽く汗を流したり，もうすぐ太陽すら拝めず，夜空を見上げることもない日常の喧騒に戻っていく不安を感じつつ，またこれからあの沸騰するような過酷な夏がやってくる恐怖と葛藤しています。

近年異常気象が続き，猛暑や豪雨が毎年繰り返されています。昨年の日本は前年の史上最高気温の記録があっさり更新され，日本の周辺は世界でも有数の気温上昇エリアとなっています。日本の風情ある「四季」が「二季化」してきており，もはや異常気象ではなく，これが日本の気象と言わざるを得ない状況です。

この気象の変化を受けて，日本スポーツ協会は熱中症対策を推進し，日本サッカー協会では，7～8月に主催大会を原則開催しないことを宣言しました。これは夏休みにスポーツを控えるようにという通達ではありません。

中央アジアに位置するウズベキスタンは砂漠のなかに位置し，冬は-10℃，夏は40℃前後まで変化します。夏のウズベキスタンでは朝7時ころから小学生ぐらいの子供たちがサッカーの試合を行い，昼間は家族で生活するという風景を目の当たりにしました。

また欧米ではマルチスポーツの概念が定着しており，シーズン制の導入や練習で他種目を応用するなどし，複数のスポーツを経験する機会が設けられています。例えばアメリカでは1年間を3つのシーズンに分けて野球，アメフト，バスケットボールといった具合です。これは気象の変化に対応するだけでなく，運動能力の向上やけがの予防にも有用であることが報告されています。

さて自分はスポーツドクターであると同時に2人娘の父親でもありますが，2人とも小さなころから水泳をしてきました。大分県の公式大会の開催は50mの屋外プールです。

娘たちが背中一面真っ赤にやけどのように日焼けして帰ってくるのです。

暑熱化の影響で，夏は水温が高くなり，九州大会以上の大会が開催できない事態が続いています。全国に屋内競技用プールは約90施設あり，大分県を含む7県のみに屋内競技用プールがなく，育成の観点からも競技者離れなど深刻な状況が生じていると感じています。

国民スポーツ大会の競泳をみると，真っ黒に日焼けした大分県代表選手は見つけやすいのですが，その裏腹に違和感を覚えることも事実です。

今後中体連の民間移行とともにマルチスポーツを推進していくことからも，大分県内に公認の屋内競技用プールが建設されることを切に願っています。